

解 説
-----



# 第21回品質工学研究発表大会振り返り

## Looking back on the Papers in the 21st Quality Engineering Society Annual Meeting

明吉 秀樹\*<sup>1</sup>  
Hideki Akiyoshi

鴨下 隆志\*<sup>2</sup>  
Takashi Kamoshita

浜田 和孝\*<sup>3</sup>  
Kazutaka Hamada

矢野 耕也\*<sup>4</sup>  
Koya Yano

矢野 宏\*<sup>2</sup>  
Hirosbi Yano

吉澤 正孝\*<sup>5</sup>  
Masataka Yoshizawa

田村 希志臣\*<sup>6</sup>  
Kisbio Tamura

(司会) 中島 建夫\*<sup>7</sup>  
Takeo Nakajima

### 1. 全体を振り返る

司会(中島) 2013年の大会発表の振り返りを行う。2013年の大会は6月20, 21日に行われ、発表件数は93件、参加者が652人で、昨年より1割程度減少した。

マクロ視点、新しいことについて、発表の全体動向、流れ、これからの方向、課題、受賞発表の評価、賞にならなかったけれど注目したい発表について議論したい。

#### マクロ視点について

中島 大会のテーマにあるマクロ視点は社会科学のマクロ、ミクロ問題ではなく、時間的、空間的広がりを見ることと考える。時間的というのは、先を見る先行性で、空間的というのは、部分最適ではなく全体最適をさし、少し前まで戦略という言葉を使っていた。経済学でいう、マクロ経済は国、ミクロ経済は企業とか個人に当たるが、それとは違うと思う。

矢野(宏) マクロ視点は田口玄一にあったもので、

今に始まったものではない。『田口玄一論説集』第2巻の編集をしているが、1970年代の論文「経営者・管理者のための品質管理」(今の言葉で言えばマネジメント)で考え方を述べている。もう、1970年代にマクロ視点で解いている。1980年代に日本でこれ以上理解されないと行って、米国に行った。2013年第6回品質工学技術戦略研究発表大会で、中小企業はいかに品質工学をやったらよいかを調査した結果を三宝化学工業の吉野節己と発表した。①なぜこんな良いものが広がらないのか。②タグチメソッドの出る前に日本では田口玄一はどう評価されていたのか、米国では、また帰国後どう評価されたのかという質問があった。1980年代田口玄一は日本を見放している。それをわれわれは忘れてはならない。一度見放されているという恥ずかしさから出発すべきだ。田口玄一の技術戦略、戦術、戦闘を総合する形で具体化するには技術展開すべきとトルネードモデルをベースに吉澤は考え出してくれた。吉澤の技展をもっと高く評価すべきだ。現在、私はトルネードモデル以上のものを考えないといけないということを考えている。

吉澤 田口玄一は、1960年代にはマネジメントでどうすべきかという解を持っていたように思う。電気通信研究所のモデルはベル研にあり、アメリカの研究スタイルを理解していたと考える。当時、通研に戦後の優秀な科学者、技術者を2000名近く集めた国家予算の2.2%の大規模な国家プログラムでもあった。現在でいえば2兆円弱の予算規模である。

\*<sup>1</sup> 元(株)リコー

\*<sup>2</sup> 応用計測研究所(株)

\*<sup>3</sup> Hamada Quality Solution

\*<sup>4</sup> 日本大学

\*<sup>5</sup> クオリティ・ディープ・スマーツ有限責任事業組合

\*<sup>6</sup> コニカミノルタ(株)

\*<sup>7</sup> 東京電機大学